

ガンと闘いながら 明るく生きる

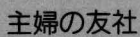
由可利ちゃん

19才の知恵袋ノート

井上由可利



知恵袋ノート





いのうえ ゆかり
井上由可利

昭和39年、東京生まれ。
世田谷区立用賀小学校、
同中学校卒。現在、都立
千歳高校休学中。

由可利ちゃん 19才の知恵袋ノート 定価980円

昭和59年7月10日 第1刷発行

著者：井上由可利

発行者：石川晴彦

発行所：▲株式会社主婦の友▲

東京都千代田区神田駿河台1-6 〒101

Tel(03)294-1111(大代表) 振替/東京216番

印刷所：大日本印刷株式会社

星野精版印刷株式会社

もし、落丁、乱丁、その他不良の品がありましたら、おとりかえいたします。
お買い求めの書店か、本社へお申してください。

©Yukari Inoue 1984 Printed in Japan

ISBN4-07-920284-9 C5077

はじめに

由可利ちゃんは、いま19才です。二年前、高校三年生のときに発病しました。咽頭シユヨウです。手術も不可能で、抗ガン剤やら放射線やらで治療をつづけてきました。二年たったいま、いろいろの治療の副作用からやっと解放され、モルヒネと丸山ワクチンで小康を保っています。

由可利ちゃんが、病気の間にも、テレビで見たり、本で読んだりしたことの中から、これは役に立つ、おもしろいナと思ったことをメモした、“暮らしのアイディア・ノート”がいったまいました。

もっと医学が進んで、ガンを撲滅できる日が一刻も早くくればいいと願いながら、健康になったらお勤めにも行って、できたらまたこういう本を出したいと夢みる由可利ちゃんです。

その由可利ちゃんの闘病記と、入院中の日記を拾い集め、自分でも考え出した暮らしの知恵を出版してみようと思ひ立ちました。

いろいろな意味で参考になれば幸いです。由可利ちゃんも書いていますが、皆さまが考え出した“暮らしの知恵”があつたら教えてあげてください。きっと励みになると思うのです。

目次 ・ 由可利ちゃん19才の知恵袋ノート

はじめに・1

まえがき・4

第一部——手記

突然の痛み・8／予想外の進展・11／「たいへんなところにてきてるぞ」・13／連日の検査・14／ふと涙が・16／看護婦さんに励まされて・18／先生の話・20／「ガン」って何・22／毛糸の帽子とかつら・23／次々に副作用が・26／ハスミワクチンのこと・28／病院を出る・30／痛みとのたたかい・31／ついに母も倒れる・33／ごめんね、ママ・35／赤ちゃんのような母・36／ハスミワクチンも私には効かない？・38／東邦医大病院へ・39／何か治療をしてよ・41

日記(昭和58年5月7日〜6月19日)・43

新しい治療・71／今の私、これからの私・73

第二部——暮らしの知恵

A	衣類の手入れ	78
B	料理の工夫	100
C	台所を使いやすく	120
D	健康	129
E	補修・リサイクル	143
F	住まいをきれいに	153
G	植物・ペット	164
H	ちよつとしたアイディア	173

まえがき

ここに集めた「暮らしのアイディア」は、私が中学生のころから今日まで、少しずつ書きためたものです。病気のときも、ときどきメモをとってききました。

暮らしのアイディアなんておぼろげにみたいネ、と笑う人もいますが、ほんとうに小さな、こまごましたアイディアでも、知っておくと、いざというときに役に立って、とても便利ですし、同じことをするにしても、知っていれば、ぐっと手間が省けます。

近ごろは核家族がふえ、特に都会では、私自身の周りを見回しても、お父さん、お母さんに子どもが一人、二人、という家庭が大半で、昔の人が長い間に培ってきた、さまざまな暮らしの知恵が伝わってこないのです。特に私のような若い人たちには、全く知る機会のない人も少なくないと思います。

ですから、いままで、このようなことを考えていなかった人たちも、ぜひこの本を読んで、役に立つ知恵をたくさん知ってほしいと思います。どこからでもいいのです。パラパラとページをめくってみてください。そして、一つでも二つでも、「へえー、なるほど」と思うものがあつたら、ぜひ試してみてください。

この本のアイディアの多くは、いろいろな人から聞き集めたものですが、私自身の（あるいは母との）オリジナルもたくさん入っています。

つい、きのうのことです。久しぶりに母と、お菓子を作ろうということになりました。ところが粉砂糖が少し足りません。

「あきらめようか」

と言いかけたとき、ふとアイディアが浮かんできました。

普通のお砂糖をこまかく砕けばよいわけです。

何を使って砕いたと思いますか。

それはね、ゴマをするときの、あのすりこ木なんですヨ。

すると、ほんとうにサラサラの、きれいな粉砂糖が、たくさんできたのです。

アイディアは、こんなふうに、ふとしたきっかけで生まれてくるものです。

私が、こんなことに興味を持つようになったのは、小学校六年生のときでした。『知らないで損500』という本を図書館で見つけたのがきっかけでした。この本に私はとても感銘を受けました。それ以来、何かの本を読んで新しい知恵を発見すると、必ず日記のあとに一つ、二つとメモするようになりました。

そして、それが、いつの間にか何冊かのノートになったのです。別にこれを集めて何かしようという、はつきりした目的があったわけではありません。ただ、一つの趣味、一つの道楽といったところでした。

その後、私は咽喉シュエウという病気にかかって、一時中断したときもありましたが、

自宅療養に入りたいま、また少しずつ始めています。

そんな知恵の一つを毎日新聞に投書したのがきっかけで、この本を出していただくことになりました。知恵だけでなく、私の病氣のこともまとめようということになりました。

いろいろ取材してくださったり、たくさんの知恵を若者の感覚で整理してくださった二宮浩子さん、この本の出版を思い立ってくださった主婦の友社出版部の深尾恭子さん、そのきっかけをつくってくださった毎日新聞社の永杉さん、ほんとうにありがとうございます。

本ができるなんて夢みたい。いま、私は、とっても幸せです。

一九八四年五月

井上由可利

第一部 手記

突然の痛み

耳の下に、突然信じられないような痛みが襲ってきたのは、いまから二年前の昭和五十七年の九月、高校生活最後の学園祭も間近い放課後のことでした。突然、耳の下あたりがキリキリと、とがったもので突き刺されるような痛みを覚えて、私は思わずその場にうずくまってしまいました。

実は、耳の異常に気づいたのは、それが初めてではありませんでした。

高校入学後間もないころから、人と話をしていても、なんとなく聞きづらいなと思うことがときどきありました。

向こうから走ってくる車の音に気づかないでいて、突然ハッとすることもありました。かすかな不安を覚えながら、ある日一つのことになりました。両方の耳が聞こえないのではなくて、聞きにくいのは右側だけではないか、ということでした。学校の帰途、近くの耳鼻科に寄ってみました。

「鼓膜の内側に水がたまっているね」

お医者さんはそう言って、水をとってくれました。すると、不思議によく聞こえてきました。

ところが、しばらくすると、また聞きづらくなってきました。こんどは、食事のとき、物をかむ音が頭に響いたり、自分の声が内側から聞こえたりもするのです。

そのたびに病院で水をとってもらったり、薬を飲んだりの日がつづきました。そして、そのうち

にそれほど気にならなくなりました。

虫歯の痛さもほうっておくと慣れてくるのと同じことかもしれません。

いと思うと、あのとき治ったと思ったのは明らかにまちがいでした。聞こえにくさにも慣れてしまつて、しばらく病院から遠ざかっていた間にも、病巣はじわじわと広がっていったのです。

そのころの私は、それなりに充実した高校生活を送っていました。

サッカー部のマネージャーと、それにレストランでのアルバイト。もちろん学校の勉強だって私なりにきちんとやっていたつもりです。

マネージャーの仕事はじみですが、部として何をするかは、すべて私の胸一つ。それだけにやりがいもありました。いっしょに始めた友だちがみなやめてしまつて、私一人だけになつてしまつても、やめようとは思いませんでした。これは、入院のまぎわまで二年半もつづけました。

レストランでのアルバイトもけっこう楽しみでした。このレストランが、たまたま私の家の向かいにあったので、それならということ、やつと父に許してもらつたアルバイトでした。

働くことそのものも楽しみでしたが、わずかとはいえ、自分で働いて得たお金で何を買おうかな、とあれこれ思いめぐらすのはほんとうに楽しいことです。慣れるにつれて、お店の人からも由可利ちゃん、由可利ちゃんとかわいがられたり、頼られたりするようになつてくると、ますますハッキリしてしまいます。

父や母は、私のことが心配なのか、ときどきそつと様子をうかがいに来ました。

私は小学校のころから内弁慶で、たいへんおとなしい子どもだったそうです。極度の偏食で、学校も休みがちでした。入学したころは、ちょうど偏食がいちばんはげしいころだったと思います。肉はダメ、魚もダメ、野菜もダメ。こんな調子でいったい何を食べるのか、と思われるかもしれませんね。

私のいちばんの好物は、納豆だったのです。三度三度の食事は、ごはんに納豆、納豆にごはん、といった調子でした。これでは、体にいいはずがありません。母も大弱りで、古い育児日記をとり出してみると、

『虫歯が多くなり、奥歯6本銀冠をかぶせる。歯が弱くて——偏食するからなのよ。早く何でも食べるようになってちょうだいね』

そんなふうに書かれています。

そんな私が、ちょっと変わったのは、高校に入ってからでした。

マネージャーの仕事やアルバイトなどを通じて、また、友だちにも恵まれたせいもあって、私は胸の中に少しずつ自信のようなものを感じるようになってきました。

なんだか、いままで抑えつけられていたエネルギーが、一ぺんにふき出してきたみたいでした。そんなエネルギーの噴出が、体の片隅にできた小さなできものの発する危険信号に気はつきながらも、ついつい放置することになってしまったのでしょうか。

少し離れた国立病院では、アレルギーではないか、ともいわれました。アレルギーならたいしたこともあるまいと、かえって樂觀した向きもあります。

私は、自分でも意識せず、いつの間にか電話は左側の耳で受けるようになっていました。

予想外の進展

高校最後の学園祭の直前でした。

突然、耳の下が痛みだしても、それほどびっくりしなかったのは、もう長い間、そうした経過があったからでした。

しかし、こんなにキリキリとえぐられるようなはげしい痛みを覚えたのは、そのときが初めてでした。

家に帰って父に話して、あらためて大きな病院できちんとした検査を受けようということになりました。父は、さっそく、耳鼻科に強いといわれる東京医科大学の附属病院をさがしてきてくれました。

学校を一日休んで、父の車で病院に行くことになりました。

たかが耳くらいという気持ちもあって、ちょうど歯が痛むときのよう、ときおりズキンズキンという痛みを覚えながらも、まさかそこにたいへんな病気がひそんでいようとは、まだ夢にも思っていないでした。

むしろ、学園祭を前にだんだん盛り上がってきた学校を一日休むのはもったいないなあなどと思ったり、サッカー部の次の試合を早く決めなくちゃ、などと考えたりしていました。

しかし、結果は思わぬ方向へ発展しました。

医師は、「入院して検査を」というのです。

私は耳を疑いました。まさか冗談が本当になるうとは。実は、その前の日、ひょうきんな友達が、

「入院したりして、ネ」

と、私をからかってみんなを笑わせたのです。

入院すると、すぐその日から一枚のカードを持ってあちこちの部屋を回り、検査とはこんなにもたくさんあるのかと思うほど、たくさん検査を受けることになりました。

以前に行ったことのある二つの病院では、検査といえば聴力検査と、あと一つ二つといったところでした。それだけに、この病院はさすがに父が調べてきただけのことはあるなあと、感心してしまいました。

同時に私は、一つ一つの検査を受けながら、しだいに心が安堵してゆきました。ああ、やっと原因がハッキリわかって、こんどこそすっきり治ってしまうんだなあ……と。

ただ、CTスキャンという器械を使う検査だけは、一人一人に時間がかかるうえ、検査を受ける人がおおぜいいて、順番がくるまでには、かなりの日数がかかるということで、診断を急ぐ先生やさしらずで、別の病院で検査を受けることになりました。

「たいへんなうしろできつるぞ」

偶然ということはあるものです。

紹介された病院の外科部長は、高木先生といって、父が高校時代に同級生だったということがわかりました。

CTスキャンというのは、コンピューターを利用して、体の内部をX線撮影するものだそうです。普通のレントゲン撮影と違うのは、体を輪切りにしたような断面写真を数ミリおきに次々と写し出すことができることです。

ウーンというなり音とともに、体全体が頭のほうから少しずつ、白い大きなトンネルの中へ入っていきます。

父は、検査室の外の廊下で待っていました。しばらくすると、コントロール室から出てきた高木先生が厳しい表情をして、父をよびました。

「おい、入っていっしょに見ろ」

コントロール室では、画面に私の頭の断面像が映っていたそうです。

「おい、たいへんなところにできてるぞ」

先生の緊迫した表情に、父はびっくりしたといいます。

「治るのかい」と父。

「おれには、治しきれん」と外科部長。

父は、そこで思わず叫んだそうです。

「じゃ、いったい、だれが治すんだい」

けれども、こんな話を聞いたのは、ずっとあとになってからのことです。

帰り道、父はただ、「中におできができているそうだ」としか言いませんでした。

連日の検査

三カ月にわたった、第一回目の入院生活はこうして始まったのでした。

病室は廊下のいちばん奥にある、古ぼけた感じの部屋で、右と左に三つずつベッドが並んでいました。

が、耳鼻科のせい、か、フーフー苦しんでいるような人は一人もいなくて、とても明るくてのんびりしたふんいきでした。初めはおそろおそろ周囲を見回していた私も、いつの間にか打ち解けて、話の輪に加われるようになりました。

一とおりの検査が終わってから二、三日たつと、のどの細胞を切りとって調べる検査がありました。電気メスを持った若い先生が、

「若い子ののどは、弾力があって、なかなか切れないなあ」